



Title	シラーとルカーチ (一)
Author(s)	大田, 哲夫
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1970, 11, p.91-97
Issue Date	1970-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/9586
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T20:35:24Z

シラーとルカーチ

(一)

大 田 哲 夫

Schiller und Lukács (I)

TETSUO OHTA

文学作品というものが、他のすべての芸術と同様に、一般的な社会的諸規定の等価物と見做され得るものであるとすれば、文学の方法と成果は専らリアリズム論の立場から評価され批判されるべきものとなろう。ジェルジ・ルカーチもこの原理を以てヨーロッパ文学を論評しその美学と存在論を構築しているが、東西の両政治圏から彼自身に加えられた様々の批判にも拘らず（そしてそれは彼の思想的な系譜からして当然のことではあったが）、彼の労作を貫くこの原理に対する情熱は、文学及び文化の歴史を考える人達に対しては、屢々打ち毀し難い説得力を現すに至っている。而も彼のリアリズム論の基礎をなすものは独自の「存在論」であって、個としての人間と種としての人間を包括的に捉えた、還言すれば人間と社会との有機的な連繋を踏まえた、彼の所謂「総体性」(Totalität)の原理の上に導き出されたものであるために、このリアリズム論に媒介されて産み出されたものは実に生動的な印象を人に与えずにはおかない。そこに見い出されるものは単なる手慣れた論評以上のもので、云ってみれば或る新たなものの創出であり、生きた哲学の印象でさえある。

彼がシラーを論ずる時もこの例を裏切ることはない。ドイツの文学史及び精神史の研究者が古典主義期の作家、特にゲーテとシラーを取り扱う際の緊張は、譬えば我々が人麿を論じ赤人と定家の系譜を論じる際の気持に通じるものがあるかもしれないが、これらの場合通常先ずなされることは天才論という定式的な心理的座標軸の設定である。そしてそこに社会的な関連を導入した場合、これと当初の心理主義的傾向とを総体化することは極めて困難な作業となるであろう。その責を負うものは核心的な意識の不安定、云いかえればイデオロギーの缺除であって、その場合には整合的な作家像は描き得たとしてもそれは非歴史的な、単なる個としての人間か、または極端に物神化された一つの社会現象かの説明に畢るしかないであろう。勿論、ルカーチの場合にもゲーテ=シラーを天才論の枠外に放置する態度は些かも観ることはできないが、然し彼の「天才論」を特質づけているのは凡ゆる物神性の排除であり、天才の対象にまつ

わる口伝的なものの拒否であり、その内部の本質、つまり天才が持つ所の意識の先進性の剔抉である。随ってそこに彼自身の意識の延長線を探ることもできるのであるが、この意識の投影こそ或る種の魅力的であると同時にまた客観的でもあるあの作家像を齎すものでもあろう。ルカーチのシラー論にうかがえるものも、共感や反撥の心理過程や伝記的なものの分析過程といった一切の細部を省略して、シラー自身を時代の意識の反映体として把握する態度である。その際、ルカーチ自身の意識の主観的視角が確立的なものであるだけに、そのシラー像も個性的且つ生動的なものであらざるを得ないのである。

シラーを取扱う場合のみならず、凡ゆる作家や思想家を取扱う場合にもこの個性的な印象は一貫している。ルカーチが所与の対象に取組む時、彼はその対象を文学的な感情移入によって内部から探求する道とこれを社会的な視野に据えて観察する道とを完全に二分する事はしていない。なぜならば、対象の反映性は、彼によれば、決して単純な一次的なものではないからである⁽¹⁾。而もこれを考察する主体の側に一定の存在論的な基盤が明確であれば、猶のこと反映体としての対象の捉え方は一元的なものとして総体化されていなければならないであろう。

そこで、シラーを古典主義期の徴候を具現するものとして把握する際にも、ルカーチの方法は決して単なる分析や認識論的な一面性に偏することはない。彼の方法は存在論的であり、それ故時代と人間は図式的に結びつけられることなく常に矛盾を孕んだ有機的な総体性の中で関連づけられる。彼がシラーの近代性を追求する過程で、反映されたものとしてのシラー自身の（意識を含めての）行為を彩色する矛盾を、近代性それ自体の契機的な矛盾と一線化しているのも、単なる文化史的反映論や常識的な『時代の児』的発想に基づくのではない。「対話」の中で情熱的に語られている様に、彼自身の関心は、人間と歴史的社会的な諸規定の存在論的な把握であって、これは抽象的な理論や歴史の中から政治的な指導原理のみを摘出しようとする傾向とは可成り無縁なものであって、恐らくはそれは一元的なものへの志向と関係するものでさえあるであろう。勿論、この様な傾向が屢々生氣論的擬人化的世界観に陥入り勝ちであるということに対して、彼自身は言う迄もなく充分警戒の姿勢を留保しているのではあるが、

ルカーチが主張するリアリズムの本質を理解しようとする場合、我々はこういった彼の基本的なものの観方を等閑に附すわけにはゆかない。慥かにリアリズムというのは現実の「正しい」反映の仕方を意味するものではあるけれども、その「正しさ」を理論的に探求することが浅ければ、所与に対してそのリアリズム的性格を「正しく」規定することは不可能であろう。ルカーチの場合、リアリズムの理論的根柢は飽く迄も総体的関連に対する意識の明確さにおかれている。それは彼に対してエンゲルスと共通した巾の広さという印象を与えるのであるが、ルカーチの場合には、文学や芸術への一層深い感受性が見てとれるのである。

然しながら、だからといって彼がシラーを評価する場合これをリアリズムの精神の保持者であるなどという倒錯がなされているのでは勿論ない。問題となってくるのは、シラーがその意識の中にいかに正しく現実を反映させていたかということの穿取であって、つまり、シラーの意図がどこにあったにしろ、シラーの個性に具現された時代の徴候をいかに再現し得るかと

いう、ルカーチ自身の傾向が問題となるのである。若しも、シラーを歴史的社会的な目的論によってのみ観るならば、この作家の後期は寧ろ貶価されるであろう。なぜならば、後にも述べるが、市民社会の完成されてゆく過程でこの作家の果そうとした役割は、市民社会の質的転換に対する謂わば思想的歯止めともなりかねなかったからである。屢々言われる様に、彼の理念が印象づけた『仮象的国家への逃避』は現象の仮象化の主張と受けとられ、言ってみれば一種の脱社会的傾向とさえとられる危険があったからである。一方、若しもこれを素朴な天才論の立場からのみ観るならば、言う迄もなくそこには偶像的な完全評価しか残らないであろう。そして、これら二つの観方をその後の社会的歴史的変動期に於ける政治的な段階に持ち込む時（そしてこれは周知の通り事行われたのであるが）、そこにはシラー像の歪曲化された利用が看られるのである¹²。この点からも、シラーを正しく捉えなおすということは、ルカー自身にとって必要なことであった。

さて、ルカーチは二つの問題視角からシラーを論じてゆくが、その一つは経済史の側面から、近代資本主義がその最初の段階をほぼ完成し漸く経済的分業が定着し始めてこれが社会的にはっきりと意識化された時代とシラーの活動を結びつける。当然の事ながら、この社会的な意識は直接この時代の政治が当面すべき問題であって、仮令具体的に分業そのものが当時の知識階層の関心を惹かなくとも、大小に亘る政治の波はその階層をおしつづいたのであるが、シラーの場合はのちのヘーゲルを思想的に先取し得た程分業という現実を明白に意識していたという点が重要であろう。そしてルカーチはシラーの思想史的位置づけを「革命前の段階」として特質化する。今一つは精神史な視角から観たシラーの位置づけであるが、それも主として分業のこの発展段階に於けるシラーの対処の仕方にアクセントをおいている。ルカーチはここでもフランス革命後のヘーゲルをシラーの延長線に平行させることによって、当時のドイツの知識階層が分業=人間疎外という新しい社会的経済的な現象をいかに危機的に体験していたかを説明しようとしている。ルカーチは分業の主体的克服への努力という点にシラーの全関心を集約する。そして、このことを以て、主観的観念論より客観的観念論への移行過程をシラーの文学及び思想活動の中より具体化的に投影させてこようと努めている。それ故、彼が強調して見せる『カントーシラー—ヘーゲル』図式は、尠くともドイツ古典主義期の注目すべき一つの断面を描きだしているという事ができるであろう。

これらの観方は、ドイツの精神文化の特性を見極める上の重要な契機を含んでいる。例えば古典主義は勿論その前段階のシュトウルム・ウント・ドラングにしても啓蒙主義と関係するその関連の仕方は、若しもドイツの経済的社会的後進性に対する著目が鋭く深い場合には、決して単なるヘーゲル弁証法的な克服=総合といった型通りの解釈では解決できない面も含むのであるが、¹⁴ここでこれら三つの精神潮流を仮に時代の配列から外して直接ドイツの一般的後進性にぶっつけてみる事も必要なことかも知れない。なぜならば、若しも啓蒙主義がその後の発展に於て止揚されたものと看られるならば、1789年と1848年に於けるドイツの停滞はどの様に説明され得るであろうか。ドイツ古典主義が持つユートピア的な基調は明らかに歴史をイデーのレ

ヴェルでしか把握できなかつた18世紀のドイツの知識層の精神の基調と一致するのである。同時代に於けるフランスの傾向はドイツのそれと全く異っていた。経済の発展に於てイギリスとはほぼ半世紀の差をつけられていたフランスは、啓蒙主義そのものを歴史の発展と社会生活の開発発との原動力とすることができた。ドイツに於ては、経済発展の動因が精神の展開の動因となり得るには歴史的・政治的な未熟度が顕著でありすぎた。極限された政治状況の中では、必然的に啓蒙主義は禁欲的・悲観的な側面のみを露呈し、フランスに於ては市民生活を展開せしめる契機となったものがここでは逆にこれを圧迫する要因にさえなったのである。

このようなイデーを偏重する傾向がドイツ古典主義の基盤につながってくるものであるとすれば、市民社会に対するシラーの洞察も結果としては幻想に通ずるものとなる。分業の顕わす邪悪なものがシラーにとって決定的であればある程これを救済しようとする彼の行手は迷路の中に消えてゆく。シラーの努力が示す限界は、現実を現実の中で克服する可能性を閉ざされていたドイツの社会の後進性が示す限界だったのである。つまり、シラーが積極的に言い得たことは、ルカーチが言う様に『素材の非芸術的な性格の芸術的克服』⁵⁾ということのみであった。

然しながら、シラーのこのような矛盾にも不拘彼の本質的な意味に於ける近代的な意識或はその観方は高く評価されなければならない。彼の矛盾は寧ろ彼の意識の中に内発的に与えられているこの近代的傾向が齎すものといつてよいであろう。つまり、社会的・政治的な矛盾が歴史的にみて質的な増大を示す様になった1789年前後の凡ゆる徴候が新しい市民の意識を規定していったという歴史的な事実が問題となるのである。随つてシラーの近代的意識を再構成してこれを1848年以後の意識へと系譜づけてゆくことも、ルカーチにとっては重要な意味をもつことになる。ルカーチの階級意識論の特徴は、謂わゆる社会存在論の基盤に据えられた謂わば決定論的な歴史意識をその核心にしている点にある。つまり特定の階級意識を歴史的・総体的性の反映と見做すことによって、単体的な意識を偶然化し、そこから歴史を産みだす弁証法を掘み取ろうとするのである。ここでも彼の存在論的な基調は明確であつて、単なる客体の認識や歴史の認識論的な把握に限定されたものではない。彼がシラーの近代性を問題にする場合にも、彼のこの歴史観は一貫して表わされる。社会的後進性という18世紀に於けるドイツの特定状況のもとで形成された階級的な意識の未熟性は、必然的に一方では特定の個人的な意識を温存させ、いやそればかりかこれに栄養を与えて育ててさえゆくのであるが、このような精神状況の錯綜した矛盾も、完成された中世的・教条主義的な市民社会の変質過程の基本的な原理であろう。この状況を、仮令直観的にしろ把握し且つこれに対する何らかの変革的志向を抱き得た精神のグループがあつたとすれば、これが仮に未熟な形成段階に留るものであつても、このグループ（個人の集合）の意識は矢張り積極的な意味をもつものであろう。ドイツに於ては1948年の段階でさえ明白に露呈するあの後進性が前提となっている為に、この本来積極的であるべき意識が遂に「個人」の意識（＝イデー）に分解されざるを得なかつた。逆の観方をすれば、1789年段階での後進性が齎したこのイデーの発展が、フランス革命後の精神的な近代化段階を否定的に規定していったとさえいえるのである。それはさて置き、この場合に於けるこのエリート集団

の個人的意識こそ、この段階に於ける階級意識的なものの個人に於ける体现であったと見做し得るであろう。それ故、1789年の段階に於て最も明瞭に「近代」の何であるかを追求し、そして極めて尖鋭化された形で矛盾を照射し得たシラーの意識は明白にこの時代を反映したものにほかならなかったのである。

ルカーチはこの視座を固定することによって、一方ではシラーに於けるリアリズム的意義を明確化すると共に、シラー自身の矛盾によって却って鮮明化される所の、シラーによって原理化された近代性の意味を強調しようとしている。シラー自身はその出発点からして小市民的な観念論者である為に、彼の近代性志向も当然この限界内におかれたが、それにも不拘、彼は美の探求過程で一般的な人間の性格性を要素化することによって、人間の意識の変革の可能性を打ち出すことができた。つまり、ルカーチが指摘する通り、シラーはこのことによってレッシングやヴィンケルマンの限界を超え、美的なものの能動的な原理を明瞭化することに成功したのである。

思想史並びに精神史のこの段階に於ける特徴である古代復活の傾向は、既にヴォルテールによってフランスの古典劇を方向づける重要な動機と見做されていたし、又フランス革命の過程の中で古代ポリスの素朴な市民生活の形式が現実の政策の模範とさえ見られたのであるが、それは資本主義の発展が現実を決定的に規定してゆく歴史のこの段階を単に形式によって修飾し、現実の規模を精神の尺度或は自発的な文化の人工的な尺度を以て作り変えようとする幻想的な試みに終った。シラーもゲーテと同様にこの古代への傾倒を免れることはできなかった。然しながら、既に触れてきた様なドイツの政治的な特殊性はこの場合にもフランスに於けるとはニュアンスの異ったものを産みださざるを得なかった。即ち、フランスの進んだ政治的な段階に於いては、シトウィヤンとブルジョワジーの私的生活の側面が比較的公的なものへと転換され易かったのに対して、ドイツの段階に於てはこの転換は飽く迄も幻想でしかなかった。資本主義経済の発展は上部構造としての国家の形態を規定してゆくことは云う迄もないが、ドイツに於ける特殊性は前述の意識化されたグループが啓蒙的市民のみならず啓蒙的な貴族階級をもその構成員としていたという事情をさえ許してをり、意識の面に於て既に近代的な国家の成立を曖昧にする要素を内蔵していた。随って、古代の復活という現実を擬人化する態度に於ても、フランスではこの現実擬人化の傾向が主として古典悲劇の形式へと昇華していったのに対して、ドイツではこれは一般的なイデーの骨格をなすものとして精神の指導原理に迄成長していったのである。つまり、古典古代への讃美は、ドイツにあっては、文化の面に於ける謂わば政治的なブロックの形成につながっていったのである⁽⁶⁾。

この事は、イギリスやフランスに対する社会的政治的な立ち遅れを、精神文化の充実によって均衡化する方向を指し示している。この点について、ルカーチの興味ある指摘を引用すると⁽⁷⁾、フランスに於いて革命の文学的反映がナポレオンの没落の後で生じたのに対し、又工業の面で極めて発展していたイギリスがその著しい文学的反應を現すのが可成り後になってからであったのに対し、『あの世界的な事件に対する直接的で且つ又文学的にも極めて高度の文筆

的反應は経済的にも政治的にも後進国の状態に留っていたドイツに於て最も急速に起っている』のは『まさしくドイツの後進性と極めて密接に関係しているのは慥かなことである。』⁽⁸⁾ そして『発展のこの不均衡のもとでのドイツの経済的並びに政治の後進性は、この反應の特性全体を規定しそれと同時にドイツに於けるこれらの傾向の文学的な頂點の特性、即ちゲーテとシラーの創作上の諸問題諸解決の特性をも規定しているのである。』⁽⁹⁾

ルカーチのこのような叙述は、ルカーチ自身の思想的出発点を規定した東ヨーロッパ社会に於ける後進的な歴史意識をも想起させるものであるが、他面では意識の総体性化という彼自身の存在論的主張の特質をも窺わせる。ここでもルカーチの主題は歴史に於ける総体性を支えるものが何であるかということである。「歴史と階級意識」を経、既に相对主義的合理主義的な二元論を克服した過程に於てルカーチはその存在論の形成を通してこの原理を追求しようとした。彼が歴史の動因としての意識を階級の中に捉えるとき、彼は個人の概念を拒否せず、或場合には階級の意識の個人に於ける体现をさえ強調するのである。この點にルカーチとヘーゲルとの近縁が認められることは慥かであるが、後者が絶対精神による自己完結的な歴史観に結びついたのに対して、彼の場合は歴史の単なる認識ではなく、歴史を形成してゆくという觀念に結びついたという事は、この両者の基本的な違いを示すものであろう。こう観てくる時、ルカーチがシラーの意識に鮮明な近代的志向があると主張するのが充分な首肯を誘うのである。

シラーは近代が時代の特徴を決定してゆく中であって、いち早く近代の意味とその方向を探ろうとする。素朴的なものと有情的なものの対置は、一見した処では古代と現代、或は理想と現実の区分に基く概念の仕分けであって、心理主義的相对主義的な文学史観の微光を当てれば、そこに現れるのは単に認承された自然的完璧に対する新たな近代的なものの価値設定でしかない。然しながら、シラーがこの区分を永遠の分極と考えていたのではないとすれば、これらは何れは一致させられなければならない二つの性格であったといえるし、事実シラーの目指す所もそこにあった事は明らかな事である⁽¹⁰⁾。彼は古代的素朴なものを近代の側から決して到達できない理想とは見ていなかった。現実に於ける生の諸問題の克服一言い換えれば、分業の発展段階が齎した経済的実存的な疎外現象の克服は、ゲーテ=シラーを初めとする当時のドイツ知識層にあっては、既に触れてきた様な意味合から、専ら対象の様式化或は理念の純化という方法によらざるを得なかったのであるが、特にシラーにあっては美を性格化する事によって人間的社会的な全状況を調和させ、ルカーチのカテゴリーを用いれば、社会と人間との関連の「存在論的総体化」のための努力が認められるのである。これは近代が孕む危機的な矛盾の、シラーによる明確な受けとめを意味しているが、この様に階級の意識を自己自身に反映させ得たという、シラー自身の洞察的な個性は、その反映が本質的であっただけに彼自身の行為を矛盾化する結果をも産みだしてもいる。寧ろシラー自身の矛盾の中にこそ、近代というものの矛盾的な性格を我々は読み取ることができるとさえいえるのである。(未完)

注

- (1) 反映の二重性について、ルカーチは例えばその「映画論」の中で興味深い触れ方をしている：
„Ästhetik“ Teil I 2. Halbband, GEORG LUKÁCS WERKE. Bd.12, LUCHTERHAND. S. 489ff.
- (2) 例えば、ナチによる国民詩人的シラー像。
- (3) 続論参照。
- (4) 例えばコルフ流の精神史。これについてはディルタイ等も含めて続論で触れてみたい。
- (5) Lukács: „Der Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe“, G. L. W. Bd. 7, S. 120.
- (6) A. a. O., S. 94.
- (7) A. a. O., S. 92f.
- (8), (9) A. a. O., S. 93.
- (10) 続論参照。

(昭和45年9月30日受理)